

# 音は語る

文 藤盛一朗

連載 ④

## 《大地の歌》暗転の後の浄化 平和の希望伝える《夏の夜の夢》

音そのものが物語る、伝える力。その音へ聴き手を惹きつける力——。この8月、読売日本交響楽団を指揮したユライ・ヴァルチュハは、並外れた手腕を印象づけた。練達の奏者たちの力が120%引き出され、それが倍音のように幾重もの相乗的な音のドラマとなって客席に届く（8月19日、サントリーホール）。

### ヴァルチュハ指揮読響 闇の深さや光 精密に表現

ワグナーの《トリスタンとイゾルデ》前奏曲と「愛の死」。冒頭のチェロとオーボエの弱音の不確かさを漂わせる音の進行が、逆に「あこがれ」という物語の実在感を生む。ワグナーの音の

指揮をするヴァルチュハ（8月19日、サントリーホール）  
◎読売日本交響楽団 撮影＝藤本崇



《大地の歌》を演奏するヴァルチュハ指揮読響、クック(中央左)、ヒリー(同右)  
◎読売日本交響楽団 撮影＝藤本崇

仕掛けが息をのむように展開する。前奏曲から「愛の死」への移行行きでは、低弦が比類ない存在感を放つ。ふつうなら経過部としてなげなく通りすぎるところで、音がものを言う。愛がやがて成就する死の世界の暗示だろう。続いて高まっていくイゾルデの愛の独白は感情の奔流となる。とりわけ非凡と感じられたのは、終結に向かうハープだった。息絶えるイゾルデを優しく抱くような音。天から降るその響きこそ、指揮者と奏者の創造性が掛け合わせられ、溶け合う中から生まれた表現だったろう。

後半はマラー《大地の歌》。サー

祝祭的となる終楽章の終わりでは、第3楽章のパスカルリア主題が回歸する。元ミュンヘン・フィル首席のヨルグ・ブリュックナーらによるホルンの強奏は、前楽章の重苦しさや苦悩から一転、闇の向こうにある光を感じさせた。

### ペリー演出 妖精の世界現代に 物語に引き込む沖澤の指揮

今年のOMFでは、ブリテンのオペラ《夏の夜の夢》も最良の果実となった（8月17、20、24日。まつもと市民芸術館）。ブリテンは、シヨスタコーヴィチと親交を結んだ同時代人であり、ヴァイオリン協奏曲第1番完成の1948年にはイングリッド東部のオールドバラで音楽祭を立ち上げている。のちに《戦争レクイエム》を作曲するブリテンには、戦後の平和に寄与しようとする思いがあり、59年に作曲され、60年に上演されたこのオペラにも社会の中で役割を果たそうとする能動的な意志がうかがえる。

OMFの上演は、見て、聴いて幸福感到に満たされる舞台だった。ロラン・ペリーの演出は、読み替え演出の対極にあり、妖精たちが飛び回るシェークスピアの世界を現代によみがえらせる。沖澤のどかの指揮は、よどみなく、流れが自然で、聴く者を物語の中に引き込む。そもそもブリテンは、地元の

シャ・クック（メゾ・ソプラノ）と、クレイ・ヒリー（テノール）を迎え、まさに世界水準というべき演奏となった。終楽章の「告別」では、光と影の表情が色濃い。マラーが細やかにつけた感情の起伏が、精密に再現される。「小川のせせらぎは心地よい歌となり闇を伝う」（訳・船木篤也）とアルト（原曲の指示）が歌いだす直前、夜のしじまに響く夜泣き鳥のようなオーボエと、フルート・ソロの味わい。大地の夜の眠りの中で、人々が「とうに忘れた幸福と青春をふたたび習いそめる」と歌う場面では、第1ヴァイオリンがその輝きをドルチェの限りを尽くして表現する。マラーは、「優しく情熱的に」と指示を書き込んでいる。

平穏なまどろみや夢ばかりが描かれるのではない。マラー特有の振幅の激しさが30分弱の楽章の中間で現れる。「おおなんとという美！ おおやむことなき愛といのちに酔えるこの世！」と現世の賛歌が歌われた後、タムタムが響き、世界は暗転する（練習番号38）。バス・トロンボーンに主導される低音楽器が不気味な音型を繰り返す。ヴァルチュハの指揮棒から繰り出される表現は鋭角的だった。歌唱が戻っても続く長いトンネル。マラー個人の死の不安や恐怖というより、1911年5月18日の作曲者の死後（《大地の歌》初演は同年11月20日）、



《夏の夜の夢》の劇中劇の1シーン  
（8月20日、まつもと市民芸術館）  
◎大窪道治

聴衆の顔を思い描きながら作曲をしただろう。松本の児童・生徒が児童合唱を担ったように、初演時にはオールドバラの子供たちに合唱の機会を与えたのだろうか。

妖精が振りかける惚れ薬は思わぬ結果を生むが、申し訳なきように「間違ってしまったから」と弁解する妖精パックの表情のおかしみ。男声歌手たちの大根役者ぶりが笑わせる劇中劇では「皆を喜ばそうと思ったから」という言葉が心に響く。

ブリテンは、シェークスピア作品を基にした「喜び」の創造を通し、社会や文化の再生を図ろうとした。光や希望の存在を伝えるのは、闇や暴力を描くより難しい。マラーやシヨスタコーヴィチ、ブリテンがそのことに取り組み組んだ意味をかみしめる。

相次いで起きた二つの世界大戦の予感とも、あるいは2025年の今の世界状況の映しともとれる闇の深さを思わせる。

だが、曲には再び、光とぬくもりが戻る。「大地はいつでも春ともなれば花を咲かせ新たな緑に覆われる！ 限りなくそして永久に遥かな彼方は蒼く輝く！ 永久に…永久に…」。Cello（永久に）の弱音の歌声はオーケストラに溶け合い、チェレスタとマンドリンがきらきらと水が輝いて弾けるように重なった。ヴァルチュハには、《トリスタンとイゾルデ》の「愛の死」の終結のハープとこの部分を結び合わせる意図があったのではないかと思われる。2曲は「浄化」という一本の線でつながれ、響き合った。

### 榎本大進のシヨスタコーヴィチ 協奏曲第1番で「心の歌」体現

シヨスタコーヴィチがマラーの音楽に深い関心を寄せていたことは、以前もこの欄で書いた。榎本大進がこの8月、セイジ・オザワ 松本フェスティバル（OMF）で弾いたのは、そのシヨスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲第1番（8月23日、キッセイ文化ホール）。共演はアレクサンダー・ソディ指揮サイトウ・キネン・オーケストラ。この曲は、1947年7月〜48年3月に作曲された。ソ連社会はヒトラーの



シヨスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲を演奏する榎本大進  
（8月23日、キッセイ文化ホール）  
◎大窪道治